

メッセージ集「東日本大震災を乗り越えて、いま、更生保護の担い手として」 について

1 趣旨

平成23年3月11日に発生した東日本大震災及びその後の東京電力福島第1原子力発電所の事故により、志半ばで落命された方、お住まいの家屋が全壊された方、避難をされた方等、東北管内の更生保護関係者が受けた被害は極めて甚大であり、いまだ多くの方が生活再建の途上で御苦勞を余儀なくされております。

その一方で、震災発生直後から、多くの更生保護関係者がそれぞれの地域において、更生保護の営みの火を絶やすまいと必死に活動が続けられ、また、全国の更生保護関係者からは多くの支援と激励が届けられました。

これを受け、被災地である福島県で行われた第28回東北地方更生保護大会においては、東北でも特に甚大な被害を受けられた岩手県・宮城県・福島県の更生保護関係者から、「東日本大震災を乗り越えて、いま、更生保護の担い手として」というテーマでメッセージを発信いただき、東北管内の更生保護関係者相互の結束を新たにすることはもちろん、支援をいただいた全国の更生保護関係者の方々に思いをお伝えすることができました。

この度、これらをメッセージ集として記録し、全国の更生保護関係者に御覧いただくこととしたものです。

2 メッセージ集の取扱について

引用、転載を希望する場合は、東北地方更生保護委員会更生保護管理官室（電話022-221-3536）まで御連絡願います。

第28回東北地方更生保護大会

メッセージ

東日本大震災を乗り越えて、いま、更生保護の担い手として



平成24年11月6日（火）
於 福島市



辛いときこそ、仲間の絆を強く大切に

岩手県保護司会連合会常務理事 木村幸治
岩手県気仙保護区保護司 吉田和由

1 はじめに

被災した方々は、「当たり前前の方が当たり前でなくなった」「辛い。生まれて初めて絶望を感じた」。被災した陸前高田の市長さんは、「亡くなった方の無念さを受け止め、悔しい、負けたくないとの思いで仕事をしている。津波の復興は1ミリ進んでいる。しかし、福島は1ミリも進んでいなく、悲壮だ。大震災のことを覚えておいてください。」

先々週の10月24日開催した第38回岩手県更生保護研究大会での被災者、被災した講演講師の声です。聴いていて悔しく悲しいです。

昨年東日本大震災で被災し、本県の多くの方が苦しんでいた時、全国及び東北地方更生保護委員会を始め東北の保護司会、更生保護関係者の多くの方々から、心温かい義援金や援助をいただき大きな励みになりました。衷心より感謝申し上げます。東日本大震災では岩手県の保護司は5名、更生保護女性会員は25名の方が亡くなりました。現在保護司50数名が仮設住宅を住まいとして保護司活動を続けております。

2 その時

あの日会長は、住職をしておりましたお寺ともども津波に流され行方不明となりました。3月末で退任が決まっておりましたが、後任の会長はまだ決まっておられませんでした。副会長は住宅が流されましたが、高台に逃げて命拾いをしました。

安否確認の結果、保護司の死亡2名、家族の死亡3名、自宅の流出・全壊9名、大規模半壊1名でした。事務局では自宅を失った保護司の方々が身を寄せている避難所や親戚宅を訪問し、面会しました。死亡なされた保護司の遺族の方には弔意を表しました。

一方、保護司会事務局の事務所は市役所所有の2階建ての建物の1階にありました。2階の天井まで浸水しましたが、幸いに流れずに残っておりました。事務室は洗濯機でまわされたようにあらゆるものが散乱しておりました。そんななかでもヘドロの中から保護司会の印などを掘り出して見つけることができた時は、まるで宝物でも掘り起こしたかのような喜びを味わいました。

5月中旬に例年どおりの定例総会を開催することを目標に、役員の選考や資料の収集に取り組み、どうにか5月中旬に定例総会を実施することができ、ほっといたしました。

7月11日に法務省の青沼保護局長（当時）が、大船渡市と陸前高田市の保護司活動を取りまく環境の実態を視察されました。その際懇談及び昼食会に参加し、更に被災地を案内することにより、直接法務省との繋がりを実感し、そして力強さを感じました。

3 支えに

宮古市の被災した女性の保護司は、夫とともに避難所に逃げました。雪が降り、寒い避難所のトイレが溢れていました。どなたも掃除しておりません。その保護司が先頭に立って掃除すると、次第に手伝う人が出てきて人の輪が生まれて、避難所生活の助けになったと話しておりました。

仮設住宅の保護司さんは対象者との面接指導のため、奥さんを散歩に出してそれから面接指導をしております。

大津波の他に福島原発被災の目に見えない、恐ろしい、戻れない辛さを思うとき、胸が張り裂けそうです。石巻市の大川小学校の行方不明の（児童の）お父さんが、「娘が泥の中にいる夢を見た。正夢であってほしい」と毎日海の泥を捜している姿に、言葉もなく悲しいです。

瀬戸内寂聴が被災地宮古市に説法に来た時お聞きしましたら、この世は無常、すなわち「つねでなくなる」ということです、とお話しておりました。そうかもしれないと私自身思いこませようとしたが辛いです。この時にこそ人のあたたかい心の応援が必要ではないかと感じております。

岩手の被災地では、宮沢賢治の「雨ニモマケズ、風ニモマケズ」の詩が心を支えると言われ、静かに広がっております。また、あの二・二・六事件の時、父親を目の前で軍人に銃で撃たれて失った経験のある渡辺和子マスール様、85歳の著書に出会いました。著書には「辛い時、置かれた場所で咲きなさい」「何ができなくてもいい、ただ笑顔でいよう」「どうしても咲けないときは、地下へと根を伸ばし、咲くときに備えます」の言葉に勇気づけられました。

今こそ大切にしたいのは、大震災の辛さ無念さを共有し、保護司、更生保護関係者の絆、そして東北の仲間の絆を少しでも太くすることだと思います。苦しい時は、絆が切れそうになるかもしれませんが、しっかりと手を繋ぎ合い、絆を強くして、仲間を大切にして、少しでも力づく前を進むことです。大震災のことをお互い話し合いながら覚えて伝えることであると思っております。



その時，そして今，私は

宮城県気仙沼保護区保護司 尾形耕一

激しい巨大地震が収まった時，直感的に「津波が来る。来るぞ。逃げろ。」私は責任上，また，心の油断か，工場と店の見回りをしばらくしておりました。外の方から大きな声，表に出てみると道の両側からどす黒い泡混じりの津波が来ておりました。

「2階に上がれ」家族と従業員に声をかけました。1メートルはあったでしょうか。「3階に逃げろ」その時には波の勢いは2階をも飲み込んでおりました。「駄目だ。屋上へ行け。屋上に」私は懸命に叫び，その屋上に家族ともに急ぎ避難しました。目にしたのは，それを疑うことばかり，大きな家がそのまま流れていました。「あ，〇〇さんの家だ」また流れていく家も見ました。大きなビルの2階にぶつかり，ドスン，バリバリ，ガチャン，一瞬にしてその姿をなくしていました。私は自然の猛威の前にただただ茫然自失でした。夢かな，夢をみているのかな，夢であればいいな，そんなことを心に浮かべました。薄暗くなってきたころであります。家内と孫娘，21歳でありますけども，背中をくっつけ，小雪がちらつく中，不安と恐怖におびえながら，頑張れ，頑張っぺし，頑張ろう，その言葉だけのかけあいをいたしました。

助けてけろ！助けてください，男の声，女の人声，1階部分はまだすでに瓦礫の山，その中に声の主を捜すことは到底できない状況でありました。ゴウーという音，ドスン，バリバリ，津波は何度も押し寄せ，どうすることもできない自分との狭間で，まさに生き地獄を感じました。どんなことをしても助からなければ，生きていかなければ，自分に何度も問いかけながら，その中でも一緒にいた孫娘だけはどうしても助けてやんなきゃだめだ，生かしてやんなきゃだめだと，そのことばかりを思って，一夜を過ごしました。

夜が明け，少しずつ周りがぼんやりと見え始めたころ，やはりまた，

助けの声です。助けてくれ、助けてください、その声は本当に弱々しく感じたのはおべなるかなであります。

変わり果てた近所の町並み、その様子にただただ絶句、頭の中が真っ白になりました。その日の夕方、私は自衛隊の皆さんに救助されました。助かった、生きられた。素直にそう思いました。が、しかし、ライフラインの完全な寸断により、周りの状況情報が全く把握できませんでした。これからどうしていくのか、考えるたびに不安が先行する毎日だったと私は思います。その状況のなかにあって、少しは気持ちの落ち着きを見いだしたこともありました。仙台の観察所のことです。私の情報がほとんどとれない中、仙台から直接・間接的に地区の保護司会の動きの情報をいただきました。自分でも恥ずかしいけれども自分が生きることが精一杯でした。周りを考える余裕は本当にありませんでした。

その後全国の方々から物資の支援をいただき、それにもまして、全国の保護司会関係の皆様には多額の見舞金を賜りました。とてもとても言葉になりません。感謝あるのみ、あらためて厚く厚く御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

復旧・復興という言葉がよく使われます。私は復旧・復興、これは当事者が自立することこそがその道のやっぱりスタイルであると思います。どんなことでもいい、自分の行動で皆さんに恩返ししたいと考えています。

私どもの地域の保護司会でも2人の方が尊い命を落としました。全壊が5、半壊が5、保護司会の会員のなかで実に42%ぐらいの被災であります。関連する更生保護女性会の方も、2人の方を亡くしているようであります。また、これから今の時期もっとも大事な協力雇用主の関係では、52事業所のうち、実に70%ぐらいの被災が認められ、これらの動きが非常に懸念されているところであります。

しかし全てクリアして、今関わる保護司だけ、保護司だけでも通じて、社会に恩返しをしたいと思っております。

千里の道も一歩から。

今日を生き抜き、生き抜かん。明日の笑顔を求めて、であります。
ありがとうございます。



負けてたまっか！

福島県双葉保護区保護司会会長 堀内美智子

あの大地震から1年8か月。「負けてたまっか！」と戦ってきた1年8か月。

福島県内の更生保護関係者の被害は、死者・行方不明者2人，保護観察所に報告があっただけでも，ケガをした方が17名，家屋の損壊は588軒に及びました。

巨大地震，大津波の被害に加えて，東京電力福島第一原子力発電所の事故により警戒区域等が設定され，双葉郡内の全町村，飯館村の全域，さらに南相馬市，相馬市，田村市，伊達市，伊達郡川俣町等の一部地域が避難となり，住み慣れたふるさとを追われ，保護司，更生保護女性会等の方々も，今なお，県内はもとより，全国各地での避難生活を余儀なくされております。このようなことは，更生保護制度史上，初めてではないでしょうか。

また，原発事故は，未来ある青少年の育つ環境にも，多大な悪影響を及ぼしています。健康への懸念から，屋外の活動は制限され，子どもたちは，大好きな外遊びの場所さえ奪われてしまいました。仕事に従事しなければならない父親を県内に残しての「母子避難」。大好きな祖父母と離ればなれになり，両親とともに，より安全な場所を求めて避難しなければならなかった子どもたち。

放射能汚染は，福島県民に対しての差別的な事象まで発生させました。

原発事故は，青少年が生まれ育つ環境を大きく変えてしまいました。

農林水産業，製造業，観光等のサービス産業に対しての風評被害は，福島県の，地域を守り，仕事に従事する更生保護関係者にも，今なお，大きな影響を与え続けています。

このような中であって，大地震直後から，全国の更生保護関係者の方々からは，お見舞い金，義援金，支援物資等とともに，温かい励ましの言葉が届けられました。また，避難先にあっては，地元の保護司会など関係者の方々が，心温かく迎えてくださり，安心して一緒に活動を続けているとのうれしい報告もたくさん届いております。

私たちは、このような皆様方の真心をバネとして、先輩方が築いてきた更生保護の灯りを消すことなく歩みを続けております。

全国の関係者の皆様，県内の関係者の皆様，本当にありがとうございます。

被害の大きかった浜通りですが，できるところから活動を再開したいと，津波や地震で家が損壊し別の場所で生活しながらも事件担当を開始した保護司，避難先から通って担当を続けている保護司など，精一杯，真心の活動を続けております。

いまだ避難の続く中，私たちの双葉地区保護司会でも，地区の研修の際には，県内，県外の避難先から研修先に集まります。本年7月の“社会を明るくする運動”の強調月間には，浪江町の保護司が，更生保護女性会の方々にも声をかけ，同じ浪江町の方々が避難している応急仮設住宅11か所で啓発活動を行いました。遠く，和歌山県に避難した保護司のSさんは，長年のキャリアを生かして避難3日目から地域の子どもたちに剣道の指導を始め，さらには，福島県から和歌山県に避難している方たちを何とか勇気づけたいと，励ます会も立ち上げました。

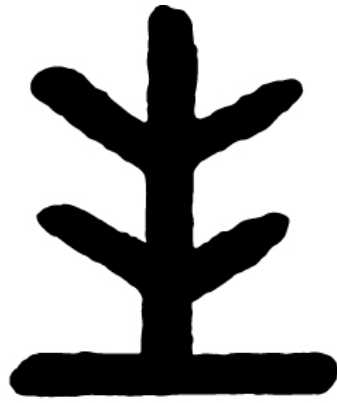
今いる所で，地域に根を張り，「社会奉仕の精神」を発揮して頑張っています。

大震災直後，電話の連絡もままならないときから，声をかけあってボランティア活動等に奮闘してきた更生保護女性会の皆様。メッセージを発信するに当たり，県の更生保護女性連盟の会長さんのお気持ちを伺いました。「津波の被害を受けた相馬，原発の被害で避難しなければならなくなった双葉。震災・原発事故後，1年休会したけれども，2年目にして，再開しますと立ち上がった会員の皆様を見て，本当にうれしかった。大感動でした」。事務局長さんと，震災直後から，会員の安否の確認に当たってこられた，その方の真心からの言葉と私は受け止めました。

私は，双葉地区保護司会会長として，先輩方がこれまで苦労を重ねて築いてきた双葉地区の歴史に空白を作ってはならない！，「負けてたまっか！」，「負けてたまっか！」，そういう思いで今日まで参りました。

何があっても，福島県の更生保護関係者の「社会奉仕」の精神は健在です。千年に一度と言われる大震災であろうと，原発事故であろうと，社会奉仕という「心の宝」は絶対に壊すことはできません。

「心の復興」の先頭に立ち，今日も一歩前進！ 勇気ある一歩を明日に繋げて，明るい社会の復興に励んでまいります。



人はみな、
生かされて
生きてゆく。